

二〇一〇年十二月 山陰研究 第三号 抜刷  
島根大学法文学部 山陰研究センター

# 佐太神社蔵『古哥仙』について

— 第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟 —

山崎真克

## 佐太神社蔵『古哥仙』について

— 第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟 —

山崎 真克

(比治山大学)

### 摘 要

本稿で取り上げる佐太神社蔵『古哥仙』は、筆跡や特徴的な字体を使用する点からみて、養法院の真筆資料として認められる。三十六歌仙の歌各一首を所載する本書は、一首歌仙本の伝本のうちの「独自型」の一種と考えられる。

キーワード・養法院 松江藩 三十六歌仙 三十六人歌合

### はじめに

稿者は、松江藩第二代藩主松平綱隆側室である養法院を中心に、これまでにも江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟に関する研究を行ってきた<sup>1)</sup>。なかでも、養法院の真筆資料として取り上げた河本家稽古有文館蔵『山水水』、佐太神社蔵『山水水』、鳥根県立図書館蔵『養法院実筆和歌集』は、いずれも書写年次が判明しており、養法院晩年の和歌事蹟を明らかにする上で非常に貴重なものであった。

本稿で取り上げる佐太神社蔵『古哥仙』は、後述するように筆跡や特徴的な字体を使用する点からみて、養法院の真筆資料として認めうるものである。書写年次は判明しないものの、養法院の和歌事蹟に加

えることができるため、本文翻刻とともに内容の紹介を行う。

### 一 『古哥仙』の書誌

佐太神社蔵『古哥仙』は、写本一帖(箱入)。箱には、「養法院様御筆ノ古哥仙短冊 五箱之内」佐太神社」と墨書した紙が貼られている。装訂は両面折帖仕立て。全十八面(表裏それぞれ九面)で、一面あたり二枚の短冊が貼られている。料紙は楮紙で、それぞれの短冊は打曇りとなっている。

表紙は木賊色で、巻雲に動物と思しき文様がみられる。草花文様に金の切箔を散らした題簽に、「古哥仙 短冊」と外題が墨書される。内



表紙



本文冒頭・見返し

佐太神社蔵『古哥仙』

題はない。金の切箔を散らした表紙見返しには、「養法院筆」という墨書による書き入れがある。但し、外題、および表紙見返しの書き入れそれぞれが、短冊本文とは別筆と思われる。寸法は、縦三八・二cm。横一四・六cm。それぞれの短冊の寸法は、縦三六・九cm。横五・七cm。

各短冊に記された和歌は、すべて一首を上句・下句に分けた二行書きで、下句は上句から一字下げの位置から記されている。虫損等はみられず、保存状態は良好である。

短冊部分の和歌本文は、これまでに養法院の真筆資料と判明した河本家稽古有文館蔵『山下水』、佐太神社蔵『山下水』、島根県立図書館蔵『養法院実筆和歌集』と全体的に同筆と思しい。また、三本に共通してみられ、これまで養法院の真筆資料とする根拠の一つであった、「似」を字母とする仮名「に」という特徴的な字体が、本書にも二例存する。これらのことから、本書を四点目の養法院の真筆資料として認めることが可能である。

しかし奥書・蔵書印等のみならず、おそらく佐太神社に奉納されたものと考えられるが、短冊の書写年次、および現在の装訂を施された時期や、伝来の状況は明らかではない。

二 本書の内容・構成

本書は、外題「古哥仙」が示すとおり、藤原公任撰の『三十六人撰』に選ばれた三十六名の歌人(いわゆる三十六歌仙)の歌各一首を短冊に記したものを、一面あたり二枚貼り付けて成した書である。これは、「三十六人歌合」とも称された『三十六人撰』の、三十六人の歌人を十八番左右に番える形態とも対応している。

公任撰の『三十六人撰』が、人麻呂・貫之・躬恒・伊勢・兼盛・中務の六人は各十首、その他の三十人は各三首、合計百五十首から成る書であるのに対し、三十六人の歌人は同一であるものの、所載された歌数に増減がみられる秀歌撰が存する。

さらに、久曾神昇氏が「三十六人の秀歌各一首を選出したものがある。伝本によって若干相違があるが、多くの伝本は次の如くである」<sup>③</sup>として挙げられているような、本書の形態に近いものも多く存するようである。これについて樋口芳麻呂氏は、「三十六人歌合」の名で『三十六人撰』の各歌人の歌を各一首選抜したものが、多数伝存するが所載歌の出入が認められる」として、宮内庁書陵部蔵「三十六人歌合古中新」(伏・五七八)。一冊)所載の「三十六人歌合」(近衛信尋(慶安二年へ一六四九)没。五一歳)筆。)、書陵部蔵『卅六人歌合』(一五〇・三二七)の冒頭の「三十六人調合」、第二番目に所掲の「三十六人歌合」の本文を引用し、所載歌が相違する実態を示されている。また歌仙絵との関係にもふれた上で、「三十六人の歌仙の歌は、撰者の好尚や享受を反映して抄出される結果、実にさまざまな伝本が作られているのである」と述べられている。

また新藤協三氏は、こうした三十六人の歌人の歌を各一首選抜する形態を「一首歌仙本」と称して、現存伝本での三十六首の和歌の所載状況を整理し、「三十六首悉く一致する伝本が二本以上（複数）存在する」六つの形態を以下のように示された。<sup>5)</sup>

- (一) 佐竹本型 佐竹本三十六歌仙絵に所載される三十六首。
- (二) 尊円本型 高田本『詩歌拔書』によって判明する三十六首。
- (三) 行俊本型 (二) 尊円本型に付された傍書によって判明する三十六首。

(四) 松花堂本型 『歌仙拾穂抄』に掲げる、近衛龍山から松花堂昭乗に伝襲された本文。『歌仙拾穂抄』とは一五首が異なる。

(五) 拾穂抄型 北村季吟著『歌仙拾穂抄』に採択された三十六首。  
 (六) 歌仙抄型 下河辺長流著『歌仙抄』に採択された三十六首。『歌仙拾穂抄』とは二一首が異なる。

これら以外には、「二本のみ同形態となるものが何種か見出し得る」ほか、「管見伝本の過半数以上が、他に類型を見出し得ぬ「独自型」となる」と述べられている。

こうした整理を行った上で新藤氏は、佐竹本所載歌三十六首を全て「A」とし、「広本三十六人歌合」(二一九首本) 本文に即してそれらと異なる歌を順次「B」「C」として、(一) ～ (六) の形態について所載歌の状況を一覽された。

そこで、新藤氏の行われた整理作業にならって、佐太神社蔵『古哥仙』所載の三十六首について「A」「B」「C」の符号を付し、出典<sup>6)</sup>にも示したのが次の表である。

【表】

初句	作者	出典
1 ほの／＼と	柿本人麻呂	古今集・羈旅・409
2 さくらちる	紀貫之	拾遺集・春・64(抄・42)
3 いつくとも	凡河内躬恒	後撰集・春・19
4 みわのやま	伊勢	古今集・恋五・780
5 まきもくの	よみ人しらず	万葉集卷十・冬雑歌・2314(新古今・20・家持)
6 わかのうらに	山部赤人	万葉集卷六・雑歌・919
7 世のなかに	在原業平	古今集・春上・53
8 たらちねは	遍昭	後撰集・雑三・1240
9 見わたせは	素性	古今集・春上・56
10 秋風に	紀友則	古今集・秋上・207
11 奥山に	よみ人しらず	古今集・秋上・215(猿丸集・39)
12 色見えて	小野小町	古今集・恋五・797
13 人のおやの	藤原兼輔	後撰集・雑一・1102
14 逢事の	藤原朝忠	拾遺集・恋一・678(抄・235)
15 あひ見ての	藤原敦忠	拾遺集・恋二・710(抄・257)
16 かくはかり	藤原高光	拾遺集・雑上・435(抄・500)
17 行やらて	源公忠	拾遺集・夏・106(抄・69)
18 有明の	壬生忠岑	古今集・恋三・625
19 琴のねに	斎宮女御	拾遺集・雑上・451(抄・514)
20 一ふしに	大中臣頼基	拾遺集・賀・276(抄・174)
21 秋きぬと	藤原敏行	古今集・秋上・169
22 よしの山	源重之	拾遺集・春・4
23 常盤なる	源宗子	古今集・春上・24
24 あたら夜の	源信明	後撰集・春下・103

25	天津風	B	藤原清正	和漢朗詠集・鶴・453(新古今・1723)
26	水のおもに	A	源順	拾遺集・秋・171(抄・115)
27	ちきりけむ	B	藤原興風	古今集・秋上・178
28	おとなしの	B	清原元輔	拾遺集・恋二・750(抄・308)
29	みよしの、	A	坂上是則	古今集・冬・325
30	としことの	A	藤原元真	和漢朗詠集・錢別・639
31	岩はしの	A	小大君	拾遺集・雑賀・1201(抄・469)
32	あり明の	A	藤原仲文	拾遺集・雑上・436(抄・501)
33	千年迄	A	大中臣能宣	拾遺集・春・24(抄・21)
34	恋すてふ	B	壬生忠見	拾遺集・恋一・621(抄・228)
35	くれてゆく	B	平兼盛	拾遺集・秋・214(抄・133)
36	あきかせの	B	中務	後撰集・恋四・846

(一)～(六)の形態と比較すると、結果的には三十六首すべて一致するものはみあたらず、佐太神社蔵『古哥仙』は現存伝本中多数存する「独自型」の一種であると考えられる。最も近いのは、5番歌「まきもくの…」(家持)、22番歌「よしの山…」(重之)、30番歌「としことの…」(元真)の三首のみ相違する「(五)拾穂抄型」である。この三首の他の形態における所載状況は以下の通りであり、特定の傾向は見出せない。

- ・ 5番歌 「まきもくの…」(家持) — 「尊円本型」「行俊本型」に所載。
- ・ 22番歌 「よしの山…」(重之) — 「佐竹本型」「松花堂本型」に所載。
- ・ 30番歌 「としことの…」(元真) — 「佐竹本型」に所載。

「独自型」の本文が生ずる理由について新藤氏は、「ある一系の本文に対して、一、二首のみ意図的に差替えることによって、結果的に独自型本文が派生する」と述べ、「書写者の恣意による改変が原因」という見解を示されている。そうした指摘に即して考えれば、佐太神社蔵『古哥仙』所載の三十六首の選定には、書写者である養法院独自の意向が強く反映されているとみることもできる。但し、三十六首すべて一致する先行の一首歌仙本に拠って選定した可能性も十分存するので、養法院の特徴と断ずるには慎重な姿勢が必要である。

### おわりに

本稿では、養法院の真筆資料と認めうるものとして、佐太神社蔵『古哥仙』についての紹介を行った。書写年次など不明な点は課題として残るものの、養法院の和歌事蹟の一端を明らかにすることができた。また、一首歌仙本という形態を有する本書からは、養法院の秀歌観を窺い知ることもできる。

また新藤氏が指摘されるように、一首歌仙本の形態は、歌仙絵や扁額などの絵画にとどまらず、入木道とも密接な関係を有する。能書として知られる養法院の「三十六歌仙」との関連を含め、資料調査に基づいた江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟に関する検討を今後も進めた

### 〔注〕

- (1) 拙稿「河本家稽古有文館蔵『山下水』について―江戸初期松江藩主周辺の和歌事蹟―」(『古代中世国文学』22 平成18・6)、同「島根県立図

書館蔵「養法院実筆和歌集」について―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―(『古代中世国文学』23 平成19・3)、同「桑原文庫蔵『高真院様宝山院様源林院様御詠草写』について―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―(『山陰研究』2 平成21・12)、同「歌集『山下水』をめぐる家と人々」(『アジア遊学』36 『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版 平成22・7)。

- (2) 17番歌第五句「きかまほしさに」、27番歌第四句「としに」一たひ。
- (3) 久曾神昇氏「三十六人集」第一章「三十六人集の成立」第四項「三十六人撰」(塙書房 昭和35・1)。
- (4) 樋口芳麻呂氏「三十六人撰の一伝本について」(『和歌史研究会会報』71 昭54・9、『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』ひたく書房 昭58・2)所収。
- (5) 新藤協三氏「一首歌仙本『三十六人歌合』の諸形態―『三十六歌仙歌注釈史稿』(一)―」(『調査研究報告』13 平成4・3、『三十六歌仙叢考』(新典社 平成16・5)所収)。以下、同氏の論の引用はこれに拠る。
- (6) 和歌の検索・歌番号は、『新編国歌大観 CD-ROM版 Ver.2』(角川書店)に拠る。

〔付記〕本稿は、山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」(研究代表者・要木純一)による成果の一部である。資料の閲覧・翻刻をご許可下さった佐太神社に厚く御礼申し上げます。

## 〔翻 刻 凡 例〕

一、翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷上の

- 都合と通読の便宜とを考慮して、次のような方針に従った。
- 1 底本の変体仮名はすべて現行の字体に改めた。
  - 2 漢字については、できるだけ底本の字体を尊重して、印字可能な範囲で字体の再現を試みた。
  - 3 和歌には通し番号を付した。
  - 4 改行は底本のままとし、一面ごとに「」を付した。

## 〔翻 刻〕

- 1 ほのくくと明石のうらの朝きりに  
しまかくれ行舟おしそ思ふ
- 2 さくらちるこのした風は寒からて  
空にしられぬ雪ぞ降ける」
- 3 いつくとも春のひかりは分なくに  
またみよし野、やまは雪ふる
- 4 みわのやまいかにまち見む年ふとも  
たつぬるひともあらしとおもへは」
- 5 まきもくのひはらもいまた曇ねは  
小松か原にあはゆきそふる

佐太神社蔵『古哥仙』について―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―(山崎真克)

- 6 わかのうらに塩みちくれはかたをなみ  
「あしへをさしてたつ鳴わたる」
- 7 世のなかにたえて桜のなかりせは  
春のこゝろはのとけからまし
- 8 たらちねはかゝれとてしも烏玉の  
我くろかみはなてつや在けむ」
- 9 見わたせは柳さくらをこきませて  
みやこそ春のにしきなりける
- 10 秋風に初かりかねそきこゆなる  
たかたまつさをかけてきつらん」
- 11 奥山に紅葉ふみ分なくしかの  
聲きく時そあきはかなしき
- 12 色見えてうつらふものは世の中の  
人のこゝろの花にそ有ける」
- 13 人のおやの心はやみにあらねとも  
子を、もふみちにまとひぬる哉
- 14 逢事のたえてしなくは中／＼に
- 15 あひ見ての、ちのこゝろにくらふれは  
むかしは物を思はさりけり
- 16 かくはかりへかたくみゆる世の中に  
うらやましくもすめる月かな」
- 17 行やらて山路くらしつ郭公  
今ひとこゑのきかまほしさに
- 18 有明のつれなく見えしわかれより  
あかつきはかりうき物はなし」
- 19 琴のねにみねの松かせかよふらし  
いつれの緒よりしらへそめ釵
- 20 一ふしに千代をこめたるつゑなれば  
つくともつきし君かよはひは」
- 21 秋きぬとめにはさやかに見えねとも  
風のおとにそをとろかれぬる
- 22 よしの山みねのしらゆきいつきえて  
今朝は霞のたちかはるらむ」

- 23 常盤なるまつのみとりもはるくれは  
いまひとしほの色まさりけり
- 24 あたら夜の月と花とをおなしくは  
こゝろしれらん人にみせはや」
- 25 天津風ふけるの浦にいるたつの  
なとか雲ゐにかへらさるへき
- 26 水のおもにてる月なみをかそふれは  
こよひそ秋のもなかなりける」
- 27 ちきりけむこゝろそつらき七夕の  
としに一たひ逢はあふかは
- 28 おとなしの河とそつゐになかれいつる  
いはて物おもふひとのなみたは」
- 29 みよしの、山の白雪つもるらし  
故郷さむくなりまさるなり
- 30 としことの春のわかれをあはれとも  
人におくる、ひとそ知らむ」
- 31 岩はしのよるの契りもたえぬへし  
あくるわひしきかつらきの神
- 32 あり明のつきのひかりをまつほとに  
わかよのいたくふけにけるかな」
- 33 千年迄かきれる松もけふよりは  
君にひかれて萬世や経む
- 34 恋すてふわか名はまたき立にけり  
ひとしれすこそおもひそめしか」
- 35 くれてゆく秋のかたみにおく物は  
わかもと結のしもにそ在ける
- 36 あきかせの吹につけてもとはぬかな  
おきの葉ならはおとはしてまし」

# A reprinting and explanation of Kokasen in Sada Jinja

YAMAZAKI Masakatsu

(Hijiyama University Faculty of Contemporary Culture Associate Professor)

## [Abstract]

Kokasen in Sada Jinja taken up by this text is taken as autograph material of Yōhōin in the point to use a handwriting and feature form of a character. This book where one poem of Thirty-six Master Poets is thought to be a kind of “Original type”.

Keywords : Yōhōin, Matsue clan, Thirty-six Master Poets, Utaawase by Thirty-six Master Poets

佐太神社蔵『古哥仙』について―第二代松江藩主側室「養法院」の和歌事蹟―(山崎真克)

七六